

# ふるさとよ!

「今でも赤と白のテーブルクロスと壁からぶら下がった藁(わら)つとくるまったイタリアワイン、キャンティのコントラストをはっきりと思い出すことができる」。福井市の繁華街、片町の真ん中で育った。店の上に住んだビザハウスの店の生活そのものが小さいころの記憶だ。



父が東京にあったイタリア人の老舗のビザハウスから人を派遣してもらい、石の焼き窯を据えて店を構えた。窯から出されクックツとチーズが音を立てるビザと肉たっぷりのミートソーススパゲティが「おふくろの味」だった。

## 友田 晶子さん

(女性ソムリエ・福井市出身)

の葬儀を終えて再び東京。「さあ何をしよう」と思いあぐねた時、あの藁つとのワインが思い浮かんだ。時は第三次ワインブームのさなか、雑誌の広告を見てパリに本部を持つワインの専門学校アカデミー・デュ・ヴァン東京校の門をたたいた。その後、本場で勉強しなければとフランスに渡るなど本格的に学んだ。その中で実感したのは、自分の国を、ふるさとをあまりにも知らないという事。そのことから日本酒の利き酒師組織の発足にも加わり、ワインだけでなく酒全般が仕事になった。



初めて酒を口にしたのは小学生。カクテルを作るためのリキュールの緑とか紫の美し

# ワインの味は福井の四季



い色にひかれてなめてみたら「これはおいしい」。でも、お酒という意識はなかった。「お酒として、初めて飲んだのは、高校生の時の女友達の家で。女の子二人でブランド一本空けちゃった」。友達は明るく日学校を休んだが、二日酔いにもならなかった。桜の季節は足羽山に行き、桜を眺め、夏は九頭竜川の川

魚を食べ、紅葉の季節も紅葉を見に行ったり、冬はそりで滑ったり、ふるさとの四季折々を楽しんだ。そんな記憶がワインの味に重なる。ワインの味を表現するのに、カシスとか火打石、なめし草の香りとか、外国っぽいものではなく、新緑の木の芽、夏の河原、青い豊、製材所の前を通ったときのおい

など、日本人が皆持っている。子供のころに経験した四季、自然の香りの記憶で説明するのが分かりやすいと人気を得た。「足羽山で食べた木の芽田楽とか、水が流れている夏の河原、夏のラジオ体操に行く前のにおい、そろそろ雪が降るなあという時のにおい。印象深く覚えている」。福井の

◆…ともだ・あきこ…◆ 1963(昭和38)年6月19日、福井市中心部の繁華街、片町(現・福井市順化2丁目)生まれ。順化小学校、明道中学校、高志高校から東京の東放学園専門学校放送芸術科を卒業。86年からワインの専門学校東京校で学んだ後、88年渡仏して、本格的に醸造を学んだ。90年ワインに関するアドバイザーや販売を手掛ける会社アクロス

(現ア・シュール・インターナショナル)を設立。97年の第2回ワインアドバイザー全国選手権大会で第3位(女性首位)入賞。一時、田崎真也氏の銀座ワインバー「アルファ」の店長も務めた。シニア・ワイン・アドバイザー、日本酒「利き酒師」、チーズ・プロフェッショナル、焼酎アドバイザー認定などの資格を持つ。東京都在住。

四季の中の香りが身体の中にインプットされているのだ。最近気になっているのが、自分の生まれ育った土地の水、その土から育った季節の旬の食材を取り入れていけば、自然と健康になれるという「身土不二」という言葉。「人に伝えられるのは、私の中に染みついていく味の楽しみ」と自覚している。日常の食事の味付け、食材、酒の味の好みに自分の中のふるさとを見つめる。「山の幸、海の幸も個性を主張するわけではないが優しいうま味がぎゅっと詰まっている」。自分の体がそれを記憶している。



「セイコガニとワインを楽しまむ会」を、ここ数年続けています。「越前ガニのメスで小さくてもミノがいっぱい入っているセイコとワインの取り合わせを紹介し「わあ、こんなおいしいカニがあったんだ」と驚いてもらうのがうれしい」。打ち立ての蕎麦にだしのばしたおろし大根をぶっかけた越前おろし蕎麦も同じ。これは福井の蔵元で酒と一緒に紹介して好評を得ている。ふるさとの味の紹介人としての喜びを感じている。米どころで水どころでもある福

井生まれにとって日本酒は欠かせない存在だ。県をアピールする初代のブランド大使に任命され、利き酒師として福井の酒も薦める。三月に八十五歳の父を亡くした。それを機に福井に住んできた血筋ということ再認識した。「東京に住んでいるが密着して生きていきたい。福井についてもっと知りたくなった。父の名乗っていた八代目友田弥五右衛門を継ぎ、私も友田弥五右衛門子と名乗るのでもいいかな」と、真剣に考えている。

絵 (西島良平、写真・蓮覚寺宏)

### 「繊細で絵心豊か」

中学時代の同級生で福井市で工業デザインの仕事をしている橋本崇さん(画)繊細で絵心豊かな女性。文化祭の壁画コンクールで、彼女が下絵を描いてクラスが優勝したのを覚えています。銀座の店も何度か行きましたが、専門知識に裏打ちされた豊かな会話がお客と弾んでいました。夜の仕事は辞めたそうですが、今は後援者として絵心を生かした執筆活動で活躍してほしいと思います。この前、中学の仲間が集まった時も「友田さんは来んのー」って、皆大騒ぎ、今でも人気者です。